

『武家義理物語』への一視点

—— 女性の登場する章をめぐって ——

平塚道世

はじめに

『武家義理物語』（貞享五年二月刊行）の序文には、『甲陽軍鑑』（慶長・元和頃成立か）の口書を意識して書いたであろうと思われる箇所がある。

以下に、『甲陽軍鑑』の口書の一部を引用する。

何の道も家職を失なはんこと勿躰なし。その家職とは、武士の家に生るるひとは奉公なり。奉公は二つあり。一つは座敷の上にての奉公、一つには戦忠の奉公なり。出家は仏道修行の儀、家職なり。儒者は儒道の儀、家職なり。町人はあきなひのこと家職なり。百姓は耕作のこと、これ家職なり。

『甲陽軍鑑』の口書では、「武士」・「僧侶」・「儒者」・「町人」・「百姓」を、階級の別ではなく、「家職」という言葉を用いて、職業の相違として捉えている。

次に、『武家義理物語』の序文の一部を引用する。

それ人間の一心、万人ともに変はれる事なし。長剣させば武士、烏帽子をかづけば神主、黒衣を着すれば出家、鍬を握れば百姓、手斧使いて職人、十露盤おきて商人をあらはせり。その家業、面々一大事を知るべし。弓馬は侍の役目たり。自然のために、

知行を与へ置かれし主命を忘れ、時の喧嘩・口論、自分の事に一命を捨つるは、まことある武の道にはあらず。義理に身を果たせるは、至極のところ、古今その物語を聞き伝へて、その類をここに集むる物ならし。

西鶴も、この序文で「武士」・「神主」・「僧侶」・「百姓」・「職人」・「商人」を、士農工商の階級の区別ではなく、職業の違いとして捉えているところが、『甲陽軍鑑』に類似する。さらに「その家業、面々一大事を知るべし」と『甲陽軍鑑』と同様に「家職」・「家業」の大切さを説いている。両者に共通するのは、武士を階級としてではなく職業（＝家職・家業）として捉える視点である。

武士に関する叙述のみを取り上げれば、『甲陽軍鑑』の口書では、「武士の家に生るるひとは奉公なり。奉公は二つあり。一つは座敷の上にての奉公、一つには戦忠の奉公なり」とする。武士の家業は主君への奉公であって、それには平常時の「座敷の上にての奉公」と、戦乱時の「戦忠の奉公」の別があると説いている。

一方、西鶴は『武家義理物語』の序文で、「弓馬は侍の役目たり」と武士の家業は武道（武芸の道）もあるとしながら、さらに、武士の家業は、「時の喧嘩・口論、自分の事に一命を捨つる」のでなく、主君への忠義・忠節を尽くすことこそ、「まことある武の道」であつ

て、「義理に身を果たせる(＝主君への忠義・忠節)は、至極のところ」と述べている。

つまり、両者とも、武士の家業は主君への「奉公」であり、「主命」への「義理」を果たすことである、と説いているのである。そして、それは同時に、西鶴が『武家義理物語』の序文を書く際に、『甲陽軍鑑』の序文の影響を、少なからず受けていることの証でもある。

このように『武家義理物語』には、『甲陽軍鑑』と類似する点がみられる。しかし、『武家義理物語』と『甲陽軍鑑』では、女性の捉え方が異なっているようにも思われる。

『甲陽軍鑑』は、武田信玄の家臣・高坂昌信によって筆録され、小幡景憲が編纂したと言われている甲州流の軍学書である。軍学書であるので当然といえば当然ではあるが、この『甲陽軍鑑』には、

「それを嘘と申すは、不案内なる武士にて、女人に相似たるひとならん。――中略――女人がひとのことをばいひ、我が悪しきことをばさまざま申しわけ、証拠もなきことに、我と我が身に理を付くる。皆これ、女のしかたなり。」(品第七)

「無理は、大小によらず至らぬひとのことわざに候。それも猶もつて女の分別のごとし。女人がよく無理を申すものなり。分別のいたりたる女人といへども、男中へんの分別ほどやうやうある、それほど直ぐなる女人は、女千人の内に一、二人あるべし。さるにつき、道理・非を知らぬ意地のきたなき武士を女には諭へたるぞ。」(品第七)

のように、否定的な武士の姿の例に女性をあげて諭えたり、「弓矢の儀は、ただ敵・味方ともにかざりなく、ありやうに申し置くこと武道なれ。かざるは女人あるいは町人の作法なり」

(品第六)

と、武士と比較して町人や女性をさげすむ傾向が見られる。

しかし、西鶴は『武家義理物語』全二十七章(二十六話¹⁾)の中で、十二章(十一話)も女性を登場させている。それだけではなく、その章に登場する女性は、話の中で重要な役割を持たされていることが多い。

では、なぜ西鶴は、『甲陽軍鑑』において低い評価しか与えられていない女性に重要な役割を与えたのであろうか。また、そこには西鶴の意図が何か隠されているのであろうか。

以下、『武家義理物語』から女性が登場する章のみを取り上げ、そこに描かれている「義理」の様相や西鶴の意図を考察してみることとする。

一 忠義・忠節の「義理」とその他の「義理」

『武家義理物語』は全六卷二十七章から構成されている。そのうち、女性が登場する章を以下に挙げる。

卷一の二「黒子は昔の面影」

卷二の三「松風ばかりや残るらん脇差」

卷三の四「思ひ寄らぬ首途の婚入り」

卷四の一「なるほど軽い縁組」

卷四の二「せめては振袖着てなりとも」

卷四の四「丸綿かづきて偽りの世渡り」

卷五の一「大工が拾ふ曙のかね」

卷五の二「同じ子ながら捨てたり抱いたり」

卷五の三「人の言葉の末見たがよい」

卷五の五「身がな二つ二人の男に」

卷六の二「表向きは夫婦の中垣」

卷六の三「後にぞ知る恋の闇討」

前述したように、『武家義理物語』の序文では至極の「義理」を「主君への忠義・忠節」と定義している。女性が登場する十二章を検討すると、卷二の三「松風ばかりや残るらん脇差」・卷四の二「せめては振袖着てなりとも」・卷五の三「人の言葉の末見たがよい」・卷六の二「表向きは夫婦の中垣」・卷六の三「後にぞ知る恋の闇討」が、このような「義理」を取り扱っていると思われる。

《卷二の三「松風ばかりや残るらん脇差」》

「丹藏はこれ程の儀、仕りかねまじき者なり。又久六はかねて知れたる臆病男。主命を重んじ、一夜を勤め、死なずに帰る事、丹藏に増したる武逆者」と、仰せられけるとなり。

柳田久六は臆病者であるにもかかわらず、主命をしつかり守り、怪奇現象が起る川屋敷へ赴き、一夜を明かすことを成し遂げたのであった。

《卷六の三「後にぞ知る恋の闇討」》

主命なれば是非もなく、先ずこの度相勤めて、後日の沙汰と、かの大藏も同道して、備中に下りしが、津の国西の宮の宿に着けば、所の人、立ち重なり、落馬して旅人の危ふかりとて、「氣付けよ、水よ」といふ声騒ぎぬ。大藏これを見て、「あれは敵の伝七なり」と、身を震はして申し上ぐる。藤五郎もこれとは、差し当つて分別し、「主命の御用の時、たとへ無事の身なりと

も、討つべきところにあらず。殊更かかる難病、なほもつて」と、大藏に義理を言ひ聞かせ、

主命により、備中の福山への使者を仰せ付けられた千塚藤五郎であったが、旅の途中にて、父親の敵相手に出くわす。しかも、敵相手は落馬をし、命が危ない所であった。しかし、藤五郎は敵相手は難病であり、まして主命の御用を勤めることが優先であるとして、敵相手を討たずに立ち去った。「主命」を重んじた藤五郎は、絶対に討たなければならない親の敵を目前にしながら、これを討たずに立ち去るのである。

ここでは第二章を例示したが、これら五章は、前述したように、序文で説いたとおりに「義理」を主君への忠義・忠節の話として描いている。

しかし、女性が登場する十二章の中で、主君への忠義・忠節の「義理」が描かれているのはこの五例のみで、全体の中で占める割合は少ない。これでは題名の「義理」は名目だけで、あまり実質が伴わない章ばかりとなってしまう。

では、西鶴はこれらの十二章において、主君への忠義・忠節という「義理」しか描かなかつたのであろうか。そこで、主君への忠義・忠節の「義理」以外にその他の「義理」が描かれていないか検討を加えてみると、これらの十二章には主君への忠義・忠節以外の「義理」も存在していた。この「義理」が描かれていたのは、

卷一の二「黒子は昔の面影」

卷二の三「松風ばかりや残るらん脇差」

卷三の四「思ひ寄らぬ首途の婿入り」

巻四の二「せめては振袖着てなりとも」

巻五の二「同じ子ながら捨てたり抱いたり」

巻六の三「後にぞ知る恋の闇討」

の六章である。

西鶴はこれら六章の中で、序文で説いた「義理」以外の「義理」を描いている。巻一の二「黒子は昔の面影」・巻三の四「思ひ寄らぬ首途の婿入り」では結婚の約束に対する義理立て。巻二の三「松風ばかりや残らん脇差」は殿の寵愛に関する義理立てがあり、巻四の二「せめては振袖着てなりとも」は窮地を救ってくれた事に対する義理立て、巻五の二「同じ子ながら捨てたり抱いたり」は夫の甥である男の子を助けることによって夫(夫の血筋)に関する義理を立て、そして、巻六の三「後にぞ知る恋の闇討」は、敵持ちの男が示した、討ち手の心ざしに対する義理立てを描いている。

これまで「主君への忠義・忠節の義理」とその他の「義理」について述べてきたが、巻二の三「松風ばかりや残らん脇差」・巻四の二「せめては振袖着てなりとも」・巻六の三「後にぞ知る恋の闇討」の三章は、二つの「義理」が重複している。しかし、その一方で、巻四の一「なるほど軽い縁組」・巻四の四「丸綿かづきて偽りの世渡り」・巻五の一「大工が拾ふ曙のかね」・巻五の五「身がな二つ二人の男に」の四章のように、「主君への忠義・忠節の義理」とその他の「義理」のどちらにも描かれていない章も十二章の中には存在する。

では、これらの章には、「主君への忠義・忠節の義理」やその他の「義理」以外の何が描かれているのであろうか。また、「義理」が描かれた章においても、その「義理」と重なって、話の展開に大きく関

係してくる「要素」が何か描かれているように思われる。

二 「愛」の描写

では、『武家義理物語』の十二章において、それらはいったい何を描いているのであろうか。本文の一部を引用する。

《巻三の四「思ひ寄らぬ首途の婿入り」》

「先月二十九日の夜、敵討たれしに疑ひなし。その子細は、自ら一心に諸神を祈りしに、この恵みにや、夢ながらその場に行きて、後詰めして、残るところなく討ち止めさせ、喜び帰ると見しが、覚めての明けの日、寝巻の小袖段々に切れて血に染まりし」

娘は亀之進が敵打ちをして、無事に戻ってくることを願っていた。ある日、娘は姿こそ見えないが、亀之進に助太刀をする夢を見た。そして、朝目覚めると寝巻の小袖がずたずたに切られ、血に染まっていた。娘は亀之進を想うあまりに、亀之進の元へ行ってしまった。

《巻四の一「なるほど軽い縁組」》

なほなほ懇ろに仕へて、心中に春日へ立願して、やすやすと討ち給ふ事を祈りぬ。

心の中ではあったが、女は春日明神に男の敵討ちが成功するようにと祈り、一層、男に心を尽くして仕えた。

「本望遂げ給ひて、追つ付け帰宅を待ち受くる」と、この時に至りて、常とは格別変はりてかひがひしく、

いざ敵討ちへ出かけようとすする男に対して、「本望を遂げて、すぐにお戻りになると信じ、お待ちしています」と声をかけ、女はい

つもとは比べ物にならないほど、甲斐甲斐しく男を励まして見送った。

《巻五の一「大工が拾ふ曙のかね」》

籠城近づきぬれば、身の果つべき事をいたはらせ給ひ、何とな
く京の親元へ送り返させ給へり。

籠城間近だった石田三成は、寵愛していた花園が命を落とすことを恐れて、花園を親元へ送り返した。それほど、石田三成は花園を寵愛していた。

元町人の娘なれば、お跡を慕ひて、命を捨ててもやらす、身を墨衣になして、その御方甲ふべき心ざしを極めしに、

石田三成が討ち死にしたと聞き、武家のような殉死のしきたりになかった町人の出身の花園は、出家の道を選ぼうとする。出家を考えるほど、花園は石田三成を愛していた。

《巻五の二「同じ子ながら捨てたり抱いたり」》

『急ぎ立ち退き、我と思ひ替へて、二人の子を随分成人いたさせ、名跡を継がせよ』と、再三頼まれけるに、是非もなき別れて、夫から「自分に尽くすつもりで、子供達を立派に育て挙げ、跡を継がしてくれ」と再三頼まれたため、夫と別れたくはなかったが、子供達を連れて、妻は泣く泣く立ち去った。

《巻五の三「人の言葉の末見たがよい」》

この息女見もせぬ梅丸に思ひひこがれ、男を持たばこの人ぞと、一筋に極めて、外への縁組、なかなか親たる人の心を背き、

小吟は梅丸へ恋するあまりに、梅丸以外の人とは結婚しないと心に決める。その外の縁談を断る程、小吟は梅丸の事を想っていた。

また梅丸も、小吟を見ぬ恋して、外よりの縁は取りあへず、年

月過ぎしを、

梅丸も小吟と同様に、小吟以外の人とは結婚しないと心に決めて、外の縁談は断った。それほど、小吟を好いていた。

互ひにこがれし仲なれば、深く契りを込めしうちに、

梅丸と小吟は相思相愛だったため、結婚してからはより一層愛を深めた。

「人間一生は夢のごとし。殊に武の家に生れさせ給ひ、主君のために、一命惜しませ給ふ御事にあらず。女の申すは愚かなれども、御最期潔くあそばされ、名を末に残させ給へ」

小吟は梅丸が殉死することを覚悟しており、梅丸の名が世に広く残るようにと、愛しているからこそ、心を尽くして対応した。

梅丸首尾よく切腹の事聞くと否や、腹かき切り、夫の供をいたしぬ。

梅丸が潔く殉死したと聞くや否や、小吟は愛する梅丸の跡を追って、自害する。

「最前名残の時、つれなき言葉に、夫気をもつて、妻の事を思ひ切らすためならん」

愛する梅丸が何の心残りもなく追腹ができるように、小吟はわざと嘘を言つて、影から梅丸の殉死を後押しした。小吟が梅丸を愛しているが故に行つた行動であつた。

《巻五の五「身がな二つ二人の男に」》

いつの頃よりか、仮初に会ひ慣れ、いとしさ又もなく恋を重ねしうちに、

遊女（Ⅱ定家）は、お客である小助と、いつしか恋仲になる。

この男も又この定家に深くなづみて、

男(源十郎)はいつしか定家を深く愛するようになる。

定家も又おのづからに気を移して、小助事は忘れし。

自然と小助の事は忘れて、定家も男(源十郎)を愛するようになる。

これも契りを重ねてから、

定家と源十郎は何度も契りを重ねた。

先づこの事小助殿に通じて、ここを立ち退き給へる文したためし時、

源十郎の敵相手が小助であると知り、すぐに立ち退くようにと、小助へ手紙にて知らせようとする。定家は、源十郎と同じくらいに、小助の事も好きなのである。

是非なく常より機嫌なる顔にして、三献の酒も心を付けて、

定家は、愛する小助を討つて欲しくないと内心思っていたが、愛する源十郎の大事な敵討ちであったため、定家はいつも以上に機嫌よい顔をして、三献の酒にて、源十郎を送り出した。定家は源十郎を愛するが故に行ったのである。

定家は心の程を書き残して、二人の勝負付かざるうちに、速やかに自害して果てける。

定家は、小助と源十郎の両者ともに愛していた。そのため、定家はどちらとも選ぶ事はできず、自害した。

《巻六の三「後にぞ知る恋の闇討」》

この女、主人是非も浮世の別れに、その嘆き止む事なく、年月の御厚恩を忘れず、せめては御菩提申はんため、都の下賀茂に柴の戸をさしこめ、姿の飾りを切つて捨て、後の世を願ひしに、妾奉公していた主人が突然の闇討ちによって命を落としたこと

に、女は大変嘆き悲しむ。そして、愛した主人を弔うために、出家する。

以上の諸章に共通するもの、それは「愛」である。巻五の二「大工が拾ふ曙のかね」は、殿からの寵愛に対する「愛」であり、巻五の五「身がな二つ二人の男に」は、遊女を挟んだ三角関係の「愛」、巻六の三「後にぞ知る恋の闇討」は、妾の主人に対する「愛」と、三章三様の「愛」が描かれている。その一方で、巻三の四「思ひ寄らぬ首途の婿入り」・巻四の一「なるほど軽い縁組」・巻五の二「同じ子ながら捨てたり抱いたり」・巻五の三「人の言葉の末見たがよい」は、夫婦の間における「愛」が共通して描かれている。

これらの章に描かれた「愛」は、平安な「愛」ばかりではなく、巻五の三「人の言葉の末見たがよい」・巻五の五「身がな二つ二人の男に」のように、「愛」しているが故に、死を選ばなければならぬ状況もあれば、巻六の三「後にぞ知る恋の闇討」のように、「愛」する人を失う場面も描かれている。

また、これらの「愛」の多くは、女性から男性の方向に注がれている。ただ例外として、巻五の一「大工が拾ふ曙のかね」巻五の三「人の言葉の末見たがよい」・巻五の五「身がな二つ二人の男に」のように、男性と女性がお互いに愛し合っている場合のみ男性からも女性に対しての「愛」も描かれているが、これ以外はすべて男性が受け手である。そして、男女が相思相愛の設定で描かれるのは、巻五のみに見られる特徴である。

三 「奇談」の描写

卷二の三「松風ばかりや残らん脇差」・卷三の四「思ひ寄らぬ首途の婿入り」・卷四の二「せめては振袖着てなりとも」には怪奇現象が描かれている。以下に、本文の一部を引用する。

《卷二の三「松風ばかりや残らん脇差」》

かの女の執心通ひて人を悩ませ、女中は難病受けて、これを嘆きぬ。いづれの女郎にも、額に鹿の袋角のやうなる物生ひ出で、美形をかしげになりて、外科・本道も伝へ聞きたる例もなく、この療治に倦みぬ。表向きの番人の役人は残らず取り殺されて、松風の執念によつて、難病にかかり、女たちの額には鹿の袋角のやうなものが生えて、顔容が醜くなつてしまつた。また、役人も松風の怨念によつて取り殺されてしまつた。すべては松風の怨念によるものであつた。

かの松風の女、昔の形は顔ばかりに残し、身は三丈余りの蛇体となつて、二人に取り掛かれば、

空き屋敷を調べに来た大平丹藏と柳田久六に襲いかかつたもの、それは三丈余の蛇へと姿が変わり、顔容のみが昔のままの松風であつた。

その跡に松風が小脇差ありて、

蛇体となつた松風を斬り伏せると、姿は消えて、その跡に松風の小脇差が残つた。蛇体の正体は松風の怨念がこもつた小脇差であつた。

《卷三の四「思ひ寄らぬ首途の婿入り」》

武運の尽きと口惜しき時、相手不思議や後髪引かれて、残らず

討ち止め、

亀之進が命の危機に直面したちよūdその時、敵方は、姿こそ見えないが、何者かによつて髪を引つ張られたように体勢を崩したので、亀之進はすかさずに反撃し、全員討ち止めた。この不思議な出来事が、亀之進を助けた。

「先月二十九日の夜、敵討たれしに疑ひなし。その子細は、自ら一心に諸神を祈りしに、この恵みにや、夢ながらその場に行きて、後詰めして、残るところなく討ち止めさせ、喜び帰ると見しが、覚めての明けの日、寝巻の小袖段々に切れて血に染まりし」

娘は亀之進の助太刀をする夢を見る。そして、朝目覚めると、寝巻の小袖がずたずたに切れ、血に染まっているという、現実には起こりえない、不思議な出来事が起きた。

このように、卷二の三「松風ばかりや残らん脇差」や卷三の四「思ひ寄らぬ首途の婿入り」は、現実では起こりえないはずの不思議な怪奇現象を示す描写がある。卷二の三「松風ばかりや残らん脇差」は、松風の怨念が怪奇現象を引き起こし、蛇体となつて姿を現す。怨念から蛇となつたと言えば、女が約束を破られた恨みから、大蛇の姿となり、道成寺の釣鐘の中に隠れた男を、そのまま焼き殺してしまつた「安珍・清姫」の話が思い出される。これも怨念から蛇の姿へとなつたが、松風も同様である。

また、卷三の四「思ひ寄らぬ首途の婿入り」は、夢の中で亀之進の助太刀をするが、その娘の姿は見えず、翌朝、ずたずたに切れ、血に染まつた娘の寝巻の小袖が証拠として残つた。

卷三の四「思ひ寄らぬ首途の婿入り」は、怪奇現象という点において卷二の三「松風ばかりや残らん脇差」と共通するが、原因は異なる。卷二の三は、松風の怨念というマイナス的要因に怪奇であったが、卷三の四は、亀之進を想う心から生まれたプラス的要因の怪奇である。

卷四の二「せめては振袖着てなりとも」は、卷二の三「松風ばかりや残らん脇差」や卷三の四「思ひ寄らぬ首途の婿入り」のように、現実では起こりえないはずの不思議な怪奇現象が起きたわけではないが、犬が人間に食物を送り届けたり、その行為を二年間余りも続けた事は不思議な現象といえる。

怪奇の要因は異なるが、両者は「奇談」として描かれている。そして、この点のみに注目すれば、『武家義理物語』より以前に書かれた、『西鶴諸国ばなし』に近い内容となっている。

四 「親への孝」の描写

卷一の二「黒子は昔の面影」・卷三の四「思ひ寄らぬ首途の婿入り」卷四の一「なるほど軽い縁組」卷五の一「大工が拾ふ曙のかね」の四章には、親に対する子の心遣いが描かれている。以下に、本文の一部を引用する。

《卷一の二「黒子は昔の面影」》

「これを人中に送りて、醜き形を恥ぢさせ、我が娘と沙汰せらるるも由なし」と夫婦内談して、「いまだ妹は何方へも契約なければ、何となくこれを遣はし申すべし」と、この事を語れば、更に身の事を嘆かず、

親は醜い顔になった姉嬢を嫁に出して、世間的に恥をかく事を気にしていた。姉嬢は親の気持ちに汲み、親に恥をかかせないために、仕方なく、十兵衛との結婚を諦めた。姉嬢は自らの結婚より親の面子を優先した。

《卷三の四「思ひ寄らぬ首途の婿入り」》

和州にありし隼人は、亀之進首尾事、明け暮れ心もとなく、夫婦言ひ出し給ふ時、娘うれしげに笑みて、「先月二十九日の夜、敵討たれしに疑ひなし。その子細は、自ら一心に諸神を祈りしに、この恵みにや、夢ながらその場に行きて、後詰めて、残るところなく討ち止めさせ、喜び帰ると見しが、覚めての明けの日、寝巻の小袖段々に切れて血に染まりし」と、語りも果てず、それを二親に見せければ、快く亀之進を待ちかねしに、亀之進の心配をする親に対して、夢の中で助太刀をした事実と、その証拠として、ずたずたに切れて血に染まった寝巻の小袖を見せて、亀之進が無事であることを知らせ、娘は親を安心させてあげる。

《卷四の一「なるほど軽い縁組」》

母にも考を尽くせば、世間で評判になるほど、娘は母親に対して、親孝行を尽くしていた。

「今は我がためにも親なれば、そのままに置くべきや」

結婚した今となっては、娘の母親も自分の母親と同じであるとして、男は義理母のために、敵討ちへ出かける。男は、敵討ちを行うことよって、義理母に孝を尽くした。

《卷五の一「大工が拾ふ曙のかね」》

身を墨衣になして、その御方用ふべき心ざしを極めしに、これ

も母の親嘆きて、無理に世を立てさせける。

愛する石田三成のために、娘は出家をしようと思ったが、母親が出家をしないでくれと、しきりに望んだので、出家を諦めた。娘は、出家の望みより、母親の望みを優先した。

この母に孝を尽くし、

男は、米屋の婿となり、娘の母親に対して孝を尽くした。

ここに描かれているのは、「親への孝」である。巻一の二「黒子は昔の面影」・巻三の四「思ひ奇らぬ首途の婿入り」では、娘が両親に対し孝を尽くし、巻四の一「なるほど軽い縁組」と巻五の一「大工が拾ふ曙のかね」では、娘が母親に孝を尽くしている。これら三章においては、親孝行をする人物を、娘として描いている。

一方で、巻四の一「なるほど軽い縁組」では、男が義理の母親のために、代わりに敵討ちを行ったとして孝を尽くし、巻五の一「大工が拾ふ曙のかね」でも、大工の男（元・武士）が義理の母親に対して孝を尽くしている。この二章・二例においては、女性と男性の両方からの親孝行を描いている。

つまり、十二章において「親への孝」は、武士だけが行う行為として描かれておらず、女性も同様に行う行為であるとしている。また、「親への孝」は、実の親、義理の親に関係なく行われるものであり、十二章の中では、主に母親に対して孝を尽くすことが多いようである。そして、この「親への孝」は、西鶴が「親への孝」を描いた『本朝二十不孝』と、「親への孝」というテーマで類似するように思われる。

五 「謎」の描写

巻四の一「なるほど軽い縁組」・巻四の二「せめては振袖着てなりとも」・巻五の一「大工が拾ふ曙のかね」では、読者に謎がなげかけられている。以下に本文の一部を引用する。

《巻四の一「なるほど軽い縁組」》

「後家の娘二十二、三なるが、その形美しく、しかも利発にて、母にも孝を尽くせば、人皆夫妻の望みあれども、浮世は飽き果てしと、この事を取り合へず。さては一度男持ちけるかと聞くに、さもなくて、花の盛りをいたづらに振袖留めて、人に見られなき風情なかりき。然れば、分けなき病気もありやと、内証詮索するに、さもなく、あたら日数をふる程に、此方の事を語り出だして、『自分は浪人衆なるが、末々頼みある御方』と言へば、母人よりはその娘聞き届けて、『その落ち目なる侍衆ならば、望みなり。先様に御合点あらば、身に任せ、お茶の通ひ、仕り申すべし』と、親しく我に語りける。手前よろしき人の言へるは取り合へず、貧家を好み参るべしとは縁なり」と、

二十二・三と少し臺が立っていたが、容貌は美しく、利発で、母親に対してよく孝を尽くす娘であったため、結婚の申し出がたくさんあった。しかし、娘は、どの縁談もすぐに断ってしまふ。不思議なことに、娘と母親は、裕福な人ではなく、浪人のような貧しい人を求めていたのである。

《巻四の二「せめては振袖着てなりとも」》

まだら犬に、紫の首玉入れて、紙袋二つ左右へ分けて結び付けられ、物言はぬばかり尾を振りて、近く寄りける程に不思議に

思ひ、母これを開けて見られしに、一つの袋には白米入れて、「命は軽し」と書き付け、又一つには種々の菓子を入れ、「義は重し」と書きしるして、主は誰とも知らず送られる。

室田母子は食物を背負ってきた犬に見覚えがなく、袋には「命は軽し」「義は重し」とだけ書き付けてあり、袋の送り主は不明であった。

《巻五の一「大工が拾ふ曙のかね》

高家にありし時、下し賜りし金銀、大分貯えしを、荷物の数々に分け入れ置きしに、銀三貫目、寝道具のうちへ人知れず置きけるに、雇ひ人、肩を揃へて道を急ぎしに、松原通り因幡業師の前にて、暫く休みしが、この銀、夜着の袖より抜け落ちて、堀の端にあるとも知らず、皆々伏見に行きける。

女は奉公して蓄えた金銀を、引越す際に、色々な荷物へ分けて入れておいた。その中で、寝道具に入れておいた銀三貫目が、落ちてしまったが、誰一人気付かずに、その場を立ち去ってしまった。

巻四の一「なるほど軽い縁組」では、結婚を望まれるような美しい娘でありながら、これまでの縁談を取り合わず、また、裕福な人は望まず、貧家を好んで嫁ごうとするなど、不可解な点が読者に投げかけられる。そして、その答えは、「私も親の敵を眼前に見ながら、女の身の悲しさは、無念の年月を送りぬ。この度、御主様と語らひをなしけるも、御心底を見定め、うれしやこの事を頼み、討ちでもらはんと思ひ入りし折節、」と話の終りに差しかかってやっと語られるのである。それまで、読者は答えが分からずに、不思議に思いながらも話を読み進める事となる。巻五の一「大工が拾ふ曙の

かね」は、銀を落としたことが事件の発端となるであろうと予想することはできるが、落とした銀や落とした女が引越してしまったことが、どのように関係してくるのか、話の展開が読みにくい内容となっている。また、落とした物は分かっているが、その落とし主が誰であるか不明とする点や、巻四の二「せめては振袖着てなりとも」のように、犬を用いて食物を送ってきた人物を話の後半まで伏せておく点は、まるで推理小説のようである。

このように、巻四の一「なるほど軽い縁組」・巻四の二「せめては振袖着てなりとも」・巻五の一「大工が拾ふ曙のかね」に共通するもの、それは不可解な「謎」である。そして、西鶴の諸作品の中では、同じように「謎」を解く話として、『本朝桜陰比事』がある。

おわりに

以上のように、これら十二章は、前述した「義理」の外に、話の要素として、「愛」・「奇談」・「親への孝」・「謎」の項目に分類することができる。

西鶴は町人的視点・観点から『武家義理物語』を書いたと評する説もあるが、本当に町人的視点や観点のみから描かれているのだろうか。中村幸彦氏が、「西鶴文学における武士」(『国文学六月号』昭和三十三年六月)で「彼が町人出身故に武士を十分に描けなかつたとか、武家を町人側から風刺したとか、とかくの評があるが、皆どこか見当がずれているように思う。」と述べているが、その意見に賛同する。

現に西鶴は、今回取り上げた巻二の三「松風ばかりや残らん脇

差」・巻四の二「せめては振袖着てなりとも」・巻五の三「人の言葉の未見たがよい」・巻六の二「表向きは夫婦の中垣」・巻六の三「後にぞ知る恋の闇討」の章のように、『甲陽軍鑑』で説かれている武士の奉公と等しい「主君への忠義・忠節としての義理」が描かれているものもある。つまり、西鶴は、常に町人的視点・観点から武士を描いている訳ではない。

また、取り上げた十二章を見ると、女性が登場する章では、町人的視点や観点が見られなかった。

では、十二章に描かれているものは何であったのであろうか。それは、主君への忠義・忠節としての「義理」やその他の「義理」と共に描かれた、男女・夫婦の「愛」、『西鶴諸国ばなし』に近い内容の「奇談」、『本朝二十不孝』と似る「親への孝」、『本朝桜陰比事』と同様に、推理小説を思わせる「謎」である。これらの要素は、それぞれが異なる意味を持ち、話の展開において大事な役割を果たしている。この要素を、ここでは「ストーリー性」と表現する。多くの章では、この「ストーリー性」という要素がいくつか重なって話が構成されている。そのため、その組み合わせを少し変えるだけで、それぞれの話のニュアンスは異なり、それぞれ個性をもった話が出来上がる。

このように女性が登場する章で西鶴は、武士の知識や教訓など武士の観念・視点を生かしつつも、そこに「ストーリー性」を注ぎ込んだのではないだろうか。そして、これこそが、武士の教訓書とは異なる、西鶴のオリジナリティーと私は考える。

もし全章の内容が町人的視点・観点から描かれていては、当時の人々が描く武士像と大きく離れてしまう。また、当時の武士の姿を

そのまま描いていては、現実との差がない作品となり、作品の「面白み」は生まれて来ない。ここでいう「面白み」とは、武士的視点と「ストーリー性」という二つの異なる物が交差するときに生まれる違和感である。この違和感こそが、西鶴のオリジナリティーで、作家の腕の見せ所となる箇所ではないだろうか。

また、巻四の一「なるほど軽い縁組」・巻四の四「丸綿かづきて偽りの世渡り」・巻五の五「身がな二つ二人の男に」の三章には、主君への忠義・忠節としての「義理」やその他の「義理」は描かれておらず、「ストーリー性」のみが際立っている。これでは、西鶴のオリジナリティーのみが浮き立ってしまうだろう。しかし、西鶴は、本文に「武家」や「武士」の言葉をちりばめることによって、武士的視点を描かれていると読者に錯覚をさせて、問題をクリアしたのではないだろうか。

そして、読者は、題目に掲げられた「義理」の言葉によって先入観にとらわれ、「義理」が必ず描かれていると思いついてしまっている。『義理』の呪縛は『武家義理物語』という題目から始まっているのではないだろうか。

※『武家義理物語』の本文は、『新編日本古典文学全集六九 井原西鶴集四』（小学館）に拠る。『甲陽軍鑑』の引用は、『甲陽軍鑑』（佐藤正英 ちくま学芸文庫 平成十八年十二月）に拠る。

註

(1) 『武家義理物語』の巻二の一「身代破る風の傘」・巻二の二「御堂の太鼓打つたり敵」は、二章で一つの話が成立しているため、全二十七章（二十六話）とした。